

水晶宮の中のエジプト — 19 世紀イギリスにおけるエジプトイメージの形成 —

中澤 務*

Formation of the Image of Egypt in 19th Century Britain

Tsutomu NAKAZAWA*

[Abstract]

In this essay I survey the historical process of the formation of the image of Egypt in 19th century Britain. Following Foucault's and Said's points of view, I analyze the following social phenomena in the 19th Century : (1)The popular shows of Panorama and Diorama of Egypt, (2)The so-called "Egyptian Hall," (3)"The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations" in 1851, (4)The importance of the "Crystal Palace," (5)Modern tourism by Thomas Cook. In conclusion, I maintain that these social phenomena, which are deeply related to each other, created the modern image of Egypt.

[要旨]

この論文の目的は、19 世紀イギリスにおけるエジプトイメージの形成のありかたを歴史的に分析し、その特徴を明らかにすることにある。そのために、ミシェル・フーコーとエドワード・サイードの視点に立ち、次のような 19 世紀イギリスにおける多様な文化的現象を分析した。(1) パノラマ、ディオラマなどの見世物文化において、エジプトがどのように描写されているか。(2) いわゆる「エジプシャン・ホール」がエジプトイメージの形成に果たした役割。(3) 1851 年のロンドン万国博覧会の近代的特徴と、異文化イメージの取り扱い。(4) 万博会場である「水晶宮」の果たした歴史的役割。(5) トマス・クックによる近代ツーリズムが、エジプトイメージ形成に果たした役割。以上の分析を通して、これらの社会現象が互いに密接に影響を与え合うことによって、近代的なエジプトイメージが形成されていったことが明らかになった。

1 はじめに

1.1 エジプトイメージ

一つの文化が異質な他の文化を見るとき、そこには必ずイメージが介在する。たとえば、現代の日本はテクノロジーの発達した高度な技術文明として、自動車やカメラなどの工業製品を通してイメージさ

* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

れる場合も多いと思われるが、他方で、エキゾティズムを感じさせる伝統文化を持つ国として、伝統的な建築や衣装などを通してイメージされることも少なくないであろう。

こうしたイメージは、その時代の社会と文化が持つ様々な要因の影響のもとで形成される。だから、時代状況が異なれば、異なるイメージが形成され、その内容は時代の変化に応じて変化していく。しかし、イメージは、時代の流れに密着してすばやく変化してくれるわけではない。イメージは、比較的長い時間をかけて徐々に形成され、社会に定着していく。そして、いったん形成されたイメージが社会に定着すると、そのイメージは次第に特権的な力を持ち、変化を拒むようになるのである。そして、そのようなイメージは、当の文化の姿が変容してしまった後でも、その文化の本質を表す姿だと信じられるようになるのである。

エジプトに対してわれわれが抱いている一般的イメージ（以後、「エジプトイメージ」）も例外ではない。われわれが「エジプト」という言葉を聞くと、まず思い浮かべるのは、ピラミッドやスフィンクスなどの古代文明の遺物であり、古代エジプト人たちの生活の姿であろう。しかし、それはエジプトの長く多様な歴史の一部にすぎないし、現代のエジプトの姿を映し出すものでもない。

このようなエジプトイメージは、ヨーロッパにおいて歴史的に生成し、定着し、そして世界に拡散して行ったものだ。そして、その形成は 19 世紀に起こっている。

実際、18 世紀末に至るまで、エジプトを含むオリエント世界は、ヨーロッパにとって近づきにくい地域であった。ヨーロッパにとってのエジプトは、聖書やギリシャ・ローマ古典を通して知られた古代文明の存在する土地であったが、ヨーロッパ人が、その実際の姿に触れることはほとんどなかった。

変化が訪れるのは、1789 年の、ナポレオンによるエジプト侵攻である。フランスがエジプトに侵攻した主目的は、植民地支配と交易であった。しかし、そうした政治的・経済的な要因だけではない。ナポレオンは古典や現代の著作を通してエジプトをよく知り、また、みずからを、エジプトを征服したアレクサンドロス大王と重ね合わせていた。ナポレオンのエジプトイメージ自体が、テキストを通して形成されたものだったのである¹。ナポレオンは、侵攻に際して、たくさんの学者を同行させ、さまざまな学術調査をさせた²。その成果は、エジプトに対する知識を飛躍的に進歩させ、ヨーロッパにおけるエジプトイメージ形成の出発点となった。そして、19 世紀を通して、エジプトイメージの形成と定着が進んでいくのである。

1.2 博物学的まなざしとオリエンタリズム

では、19 世紀ヨーロッパでなされたエジプトイメージの形成は、どのような特徴を持っているのだろうか。筆者の見解では、その形成は、近代ヨーロッパに生じた歴史的変化と密接に関連している。

大航海時代に端を発するヨーロッパの拡大と発展は、15 世紀から 18 世紀の長い期間にわたってヨーロッパの社会的構造を大きく変えていく。そのような中で、17 世紀において、知の枠組みの変化が起こる。すなわち、「博物学的まなざし」の発生である。ミシェル・フーコーによれば、類似性が構成原理であったそれまでの知の枠組みは、同一性と差異性による枠組みに変容していった。こうして、18 世紀には博物学が最盛期を迎え、世界を見るヨーロッパの視線は、物と物を併置させ分類していく

1 サイド、『オリエンタリズム』、81 頁を参照。

2 たとえば、バーリー、『ナポレオンのエジプト』を参照。

方法に変化していく³。

世界をまなざすこのような視線の変化は、まなざす主体とまなざされる客体の関係に、ある変化をもたらすことになる。すなわち、世界を発見し、発見された世界を分類していく博物学的まなざしは、必然的に、主体と客体の間の区別と、分類する側である主体の、客体に対する優位性を含意しているのである⁴。

サイードは、著名な研究『オリエンタリズム』において、18 世紀後半からヨーロッパに形成された「オリエンタリズム」の中に、そのような知のあり方を見て取ろうとした。彼は、オリエント世界に対するヨーロッパのものの見方一般を広く「オリエンタリズム」と呼び、その思考様式のあり方を批判した。彼によれば、オリエンタリズムとは、「オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式」⁵なのである。

オリエント世界（東洋）はヨーロッパ（西洋）にとって支配されるべき対象であり、それゆえに、西洋世界と対極的な性質を持たされた他者である。その他者性は、ヨーロッパが持つと見なされる特質の不在（すなわち、停滞、理性の欠如、無秩序など）の中に求められる⁶。

サイードの見解には、様々な批判がある⁷。しかし、このような見方は、オリエント世界に対するヨーロッパでのイメージ形成を考える上で、きわめて重要な視点であることは間違いないと思う。

1.3 ヴィクトリア朝期の重要性：この論考の視点

本論考では、以上のようなフーコーやサイードの視点に依拠しつつ、別の視点から問題を探ってみたい。そのために分析の素材としたいのが、19 世紀（ヴィクトリア朝期）のイギリスである。著者の見解では、この時期におけるエジプトイメージの形成過程は、比較的明確であり、この時代特有の社会的・文化的事象の影響関係を見て取りやすい。それゆえ、そこでのエジプトイメージ形成のあり方は、異文化に対するイメージ形成を考えるうえでの有益なモデルになると思うのである。

まずなによりも、この時期のイギリスの対外政策は、ヨーロッパの植民地主義を代表するものであった。イギリスにとってエジプトは、インドと並んで、重要な植民地展開の場であった。しかし、エジプトイメージ形成に関わっていたのは、そのような政治的・経済的な要因だけではない。すでに述べたように、エジプトは古くからヨーロッパの知的関心の対象であり、ヨーロッパのエキゾティシズムと深く結びついていた。そのような知的関心は、19 世紀における文化の大衆化と密

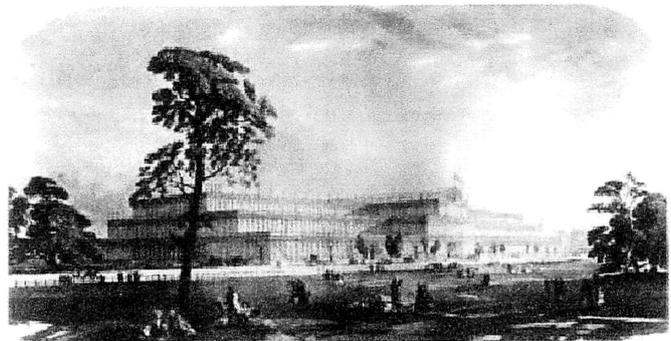


Fig. 1 水晶宮の外観 (McKean [1994] p. 29)

3 フーコー、『言葉と物』、第 1 部を参照。

4 吉見俊哉、『博覧会の政治学』、13 頁を参照。

5 サイード、『オリエンタリズム』、4 頁。

6 Cf. Mitchell, "Orientalism and the Exhibitionary Order," p. 289.

7 たとえば、サイード、『オリエンタリズム』の解説 (362-367 頁) において、杉田英明は、サイードの枠付けが画一的に過ぎ、多面的な要素を無視している点を挙げている。

接に連動することになる。ヴィクトリア朝期は、産業革命の進行にともない、中産階級が勃興し、大きな社会的変化が生じた時代であった。そのような社会的変化の中で生じた様々な文化的現象は、エジプトイメージの形成に大きな役割を果たしていると思われる。

本論考では、そのような文化的現象を取り上げ、そこでエジプトという対象がどのように取り上げられ、表象されて行ったかを概観して行こう。その形成プロセスを象徴するのが「水晶宮」(Crystal Palace)である (Fig. 1, 2)。これは、造園家のジョゼフ・パクストン (Sir Johseph Paxton, 1803-1865) によって設計され、1851年開催のロンドン万国博覧会の会場として使用された、ヴィクトリア朝期を代表する建築物の一つである。温室をモデルに、鉄骨とガラスで作られたこの近代的建築物は、万国博覧会の近代性そのものであった。そして、この万国博覧会こそ、現代につながる特徴的な異文化イメージ形成の温床なのである。19世紀イギリスにおける異文化イメージの芽は、水晶宮という巨大温室の中で成長し、そして社会に拡散して、根付いていったことになる。



Fig. 2 水晶宮内部
(McKean [1994] p. 25)

2 19世紀前半：見世物文化とエジプト

2.1 パノラマとディオラマ

まずは、ロンドン万国博覧会と水晶宮にいたるまでの前史から見ていくことにしよう。しばしば指摘されるように、19世紀は、知が視覚的になっていった時代であり、人々の視覚的欲求が高まっていった時代であった⁸。そして、そのような人々の視覚的知への欲求を満たしてくれたのが、「見世物(show)」であった。オールティックは、『ロンドンの見世物』において、17世紀から19世紀に渡るロンドンの見世物文化の歴史を詳細に追い、見世物文化がイギリスの大衆文化の形成に複雑で多様な影響を与えたことを明らかにしている。

見世物に必要なのは、日常では体験できないような、奇異な対象や目を見張る光景である。ヨーロッパでは、いわゆる「驚異の部屋」(Wunderkammer)に見られるように、世界各地から収集された珍品の雑然としたコレクションを、私邸などで陳列する習慣が存在していた。それは、博物学の発展の中で、やがて、大英博物館に代表される「博物館」の形成につながっていく。また、同様に、様々な珍しい動物を集め、展示したり芸をさせたりする見世物も盛んに行なわれていた。たとえば、ロンドンでは、19世紀前半に、エクセター・チェインジに大規模な見世物的な施設が存在していた⁹。そのような見世物は、やがて「動物園」へと発展していくことになる。

このような見世物文化の一つの核となるのが、目を見張るような光景 (スペクタクル) を演出する見

8 吉見俊哉、『博覧会の政治学』、23-4頁を参照。

9 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅱ』、第22章。

世物であり、ロンドンはそのような見世物の中心であった。1790年代になると「パノラマ」が登場する¹⁰。ロバート・バーガーは、円筒状の壁面にリアルな風景を描く手法を発明し、1974年、レスター・スクエアに円筒状のパノラマ館を建設した。

パノラマは有名な都市の鳥瞰図をビジュアルに表現し、人気を博した。しかし、それ以上に支持されたのは、そのニュース性であった。この時代は、ナポレオン戦争をはじめとして、様々な戦闘が頻発した時代である。こうしたスペクタクルを描き出すパノラマは、歴史的なドラマをビジュアルなイメージを通して大衆に伝える役割を果たしていたのである¹¹。その後もパノラマは人気を得て、ヨーロッパ各地に広まっていくが、1820年代になると、さらにディオラマや、動くパノラマなどが登場し、最盛期を迎える。

パノラマは、世界各地の代表的な風景を演出し、観客を魅了した。19世紀半ばには、ヨーロッパだけでなく、アメリカの風景の巨大なパノラマが人気を博していたが¹²、同様に、中近東や東洋のパノラマも公開され、人々はこれらの地域に関する関心を掻き立てられていた。たとえば、1850年には「インドへの大陸横断路」というパノラマが公開されて多くの観客を集めたが¹³、エジプトもインドと並ぶ人気の素材であった。1849年には、後述のエジプシャン・ホールにおいて、エジプトのパノラマが公開されている。この見世物では、ナイル川の西岸を見ながら上り、瀑布で折り返した後、今度は東岸を見ながらナイル川を下るもので、なかでもアブ・シンベル神殿と、砂漠の中の隊商の光景が人気を博したという¹⁴。

2.2 エジプシャン・ホール

19世紀前半におけるエジプトイメージに関して、もう一つ重要なのが、「エジプシャン・ホール」と通称される建築物（正式には「ロンドン博物館」）である（Fig. 3）¹⁵。これは、興行師であり、博物学者でもあったウィリアム・ブロック（William Bullock, 1773-1849）によって建設されたものであり、様々な博物学的展示を目的として、1812年に営業を始めている。

この建築物が「エジプシャン・ホール」の名で呼ばれたのは、その外観や内装が、エジプトをモチーフとしたものだったからである。Fig. 3に見られるように、建物の最上部にコーニス（軒蛇腹）が付けられ、スフィンクス像およびイシスとオシリスの像がそれを支えていた。そして、壁には、当時はまだ未解読であったヒエ

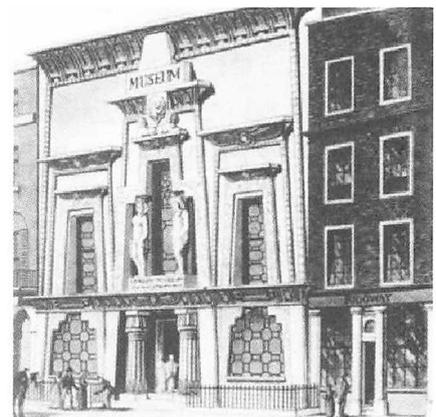


Fig. 3 エジプシャン・ホール
（オールティック [1990] 192頁）

10 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅰ』、第10章。

11 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅰ』、353-4頁。

12 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅱ』、113頁以下。

13 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅱ』、117頁。

14 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅱ』、114頁。

15 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅱ』、第18章。

ログリフが刻まれていた¹⁶。

このデザインは、デンデラにあるハトホル大神殿をモデルにしており、当時はエジプトの最も印象的なモニュメントとされていたものであったが、その様式はプトレマイオス朝後期の様式とローマ様式の混合形式であった¹⁷。

このような建築物が、19世紀初めに建設されたことには、理由がある。ナポレオンとの戦争の舞台となって以降、それまで関心を持たれることのなかったエジプトは、イギリス人たちの大きな関心の対象に成長していたのである。当時は、エジプトに関する考古学的事実はほとんど知られていなかったし、現実のエジプトの姿についての知識もほとんどなかった。そうした当時の乏しい知識を通して描かれたエジプトイメージが、まさにこの建物だったわけである。

さて、エジプシャン・ホールは、単にその建築上のデザインによって、エジプトイメージの形成に寄与しただけではない。この博物館では、エジプトに関する様々な展示もなされたのである。重要なのは、イタリア人のベルツォーニ（Giovanni Battista Belzoni, 1778-1823）によるエジプトの美術品や工芸品の展示である。イギリスは1807年にエジプトに侵攻する。講和成立後、彼はイギリス総領事ソールトの代理人となり、三年間にわたり発掘をおこなう。彼はアブ・シンベル神殿、王家の谷の六つの王墓など、様々な発見をする。彼は1820年にイギリスに戻り、発掘の詳細を描いた著書を発表し、その成果を1821年にエジプシャン・ホールで公開する。この展示は成功を収め、一年以上継続した。

このように、19世紀初頭において、エジプトのイメージが形成を促したのは、エジプシャン・ホールであった。

3 万国博覧会

以上のように、19世紀前半にエジプトのイメージは徐々に形成されていくわけであるが、これらの流れを引き継いだのが、近代を代表する国家的行事である万国博覧会であった。そのルーツは、1851年にロンドンで開催された博覧会、The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations（いわゆる、ロンドン万国博覧会）にあり、これが現代まで続く万国博覧会の原型を作った。

すでに指摘したように、万国博覧会が重要なのは、近代社会を形成する様々な要素がそこに集約されているからである。万国博覧会は、近代の特徴を映し出す鏡であるとともに、近代を作り出す力の源でもあった。以下、その特徴を4つのキーワードで説明してみたい。

①商品：ロンドン万国博覧会の正式名称が「すべての国家の産業製品の大博覧会」であったことからわかるように、万国博覧会とは産業博覧会であり、ヨーロッパの産業の発達に連動している。万国博覧会の参加はおよそ1万5千件あり、展示品の数は10万点にのぼり、それらは原料部門、機械部門、製品部門、彫刻・美術部門に分けられ展示された¹⁸。情報伝達が十分でなかった19世紀において、万国博覧会は、人々が〈商品〉と出会う場であった。

②大衆：このように、一般大衆にとって、万国博覧会は、近代社会の生み出した商品に出会う場として機能したが、これは、万国博覧会が、第2章で取り上げた見世物文化の延長線上に位置していること

16 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅱ』、193-4頁。

17 オールティック、『ロンドンの見世物Ⅱ』、194頁。

18 松村、『水晶宮物語』、第8章を参照。

を意味する。万国博覧会は、大衆娯楽の一部としての機能も果たしたのである。ロンドン万国博覧会では、入場者を増やすために、日によって入場料に差が設けられ、それによって入場者の数や社会的階層に違いが見られた。月曜日から木曜日までは、入場料が最も安い 1 シリングであり、一般大衆で混雑した¹⁹。ロンドン万国博覧会の全入場者 600 万人の内、440 万人あまりがこの料金で入場している。

③教育：19 世紀には、見世物文化は、単に大衆の好奇心を満足させるだけではなく、様々な近代的知の経験を大衆に与える、教育的機能を果たすようになっていた。われわれは、万国博覧会が果たした教育的機能を見逃してはならない。

④帝国：最後に、万国博覧会と帝国主義の間の密接な関係に触れておこう²⁰。この時代は、帝国主義の時代であった。ヨーロッパ各国は、競って非ヨーロッパ地域に植民地を作り、経済的に発展していった。万国博覧会は、このような帝国の植民地を展示し、国民に帝国の拡大を知らしめる役割を果たした。実際、ロンドン万国博覧会では、東インドを筆頭に、大英帝国の植民地の産物が展示された²¹。このような傾向は、19 世紀後半になるとさらに強まり、より体系的で大規模な植民地展示がなされるようになっていったのである。

以上のように、万国博覧会は、近代社会を多面的に映し出す鏡であるとともに、近代社会の枠組を強化していく権力装置であった²²。では、このような万国博覧会の特徴は、エジプトイメージの形成にどのような影響を与えたのであろうか。

エジプトはヨーロッパの植民地政策の重要な地域であったが、それとともに、ヨーロッパにとっては文化的な関心の対象となる地域であった。とりわけ、19 世紀を通して進展して行った古代エジプト文明の遺跡発掘と調査は、古代エジプトに関する知識を急速に拡大していった。エジプトは、様々な意味で、ヨーロッパの大きな関心の対象だったのである。

一連の万国博覧会においても、エジプトは主要な展示対象のひとつであった。たとえば、日本も初めて参加した 1867 年の第二回パリ万国博覧会では、その規模は大きく拡大され、展示範囲も文字通りの万国博覧会となった。この博覧会では、会場内の巨大な庭園の中にいくつものパビリオンが設けられ、エキゾチックな異文化の展示が行なわれた。アフリカの中で、フランスと最も関わりの深かったエジプトについても、オリエント色の強い見世物的な展示や、ファラオの神殿の展示などが

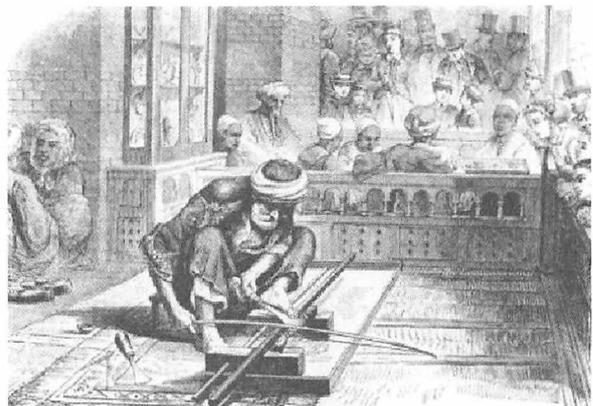


Fig. 4 エジプトの職人を見る観客
(鹿島 [1992] 264 頁)

19 松村、『水晶宮物語』、197 頁、春山、『万国博』、159 頁。

20 水晶宮という建築物そのものが、イギリスの植民地主義の産物でもあった。なぜなら、この鉄とガラスによる巨大建築物の原型は温室であり、温室の起源は、植民地の熱帯植物を栽培することにあつたからである。吉見、『博覧会の政治学』、34-40 頁を参照。

21 特に、イギリスにとって最も重要な植民地であるインドの展示は重要であった。なお、万国博覧会におけるインドとイギリス植民地主義の関連については、L. Kriegel, "Narrating the Subcontinent in 1851: India at the Crystal Palace" において詳しく分析されている。

22 吉見俊哉、『博物学の政治学』、終章を参照。

行なわれ、観客を集めた (Fig. 4-6) ²³。

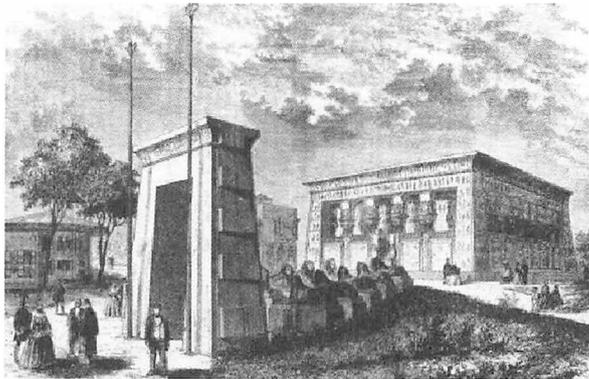


Fig. 5 ファラオの神殿
(鹿島 [1992] 267 頁)



Fig. 6 神殿を見物する観客
(鹿島 [1992] 267 頁)

4 19 世紀後半

4.1 その後の水晶宮

水晶宮をロンドン万国博覧会終了後どうするかについては、国会で議論されていたが、設計者のパクストンは一つの希望を持っていた。それは、水晶宮を「ウィンター・ガーデン」として巨大な温室にし、そこに植物や噴水などを配して、見学者の保養や教育のために使うというものであった。この希望を支持する世論が形成されていったが、結局、水晶宮は解体された後、ロンドン郊外のシデナムに移設される結果となった (Fig. 7) ²⁴。

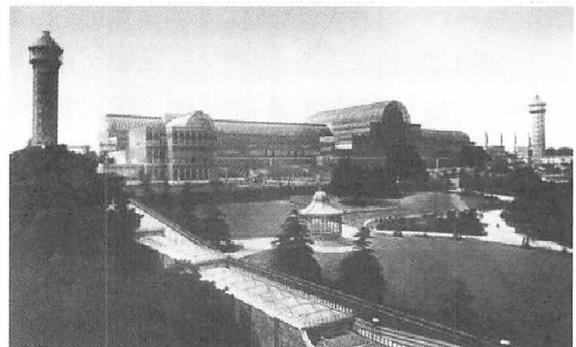


Fig. 7 再建された水晶宮
(McKean[1994] p. 45)

新しい水晶宮は、1854 年に開場する。中央部には大きな噴水が設置され、温室内には温帯と熱帯の様々な植物が植えられ、様々な展示室が設けられた。北側には、エジプトを含む様々な地域や時代の美術品が展示され、見学者は実物を見ながら建築や美術の変遷を理解できるようになっていた (Fig. 8) ²⁵。新水晶宮は、教育施設として、1934 年に火災で焼失するまで、その機能を果たしていくことになる。

23 鹿島、『絶景、パリ万国博覧会』、第 6 章を参照。

24 松村、『水晶宮物語』、第 11 章、春山、『万国博』、第 14 章を参照。

25 松村、『水晶宮物語』、222 頁。

4.2 クックのエジプト旅行

最後に、この時代のもう一つの特徴である近代ツーリズムの発展とエジプトイメージとの関連について触れておきたい。

近代ツーリズムは、トマス・クック (Thomas Cook, 1808-1892) によって始められた。クックは禁酒論者であり、彼がさまざまな団体旅行を実施した目的もそこにあった。しかし、それは、当初の目的を超えて拡大していくことになる。1871 年には、息子たちとともに、トマス・クック・アンド・サン社を設立し、世界的な旅行会社として発展していく。

実は、すでに述べたロンドン万国博覧会も、近代ツーリズムと関連している。クックは、団体旅行による博覧会見学の企画を立て、イギリス各地から見物客をロンドンに送り込んだ。彼は、労働者階級のために、三ヶ月前から毎週小額の積み立てをさせ、それをロンドンまでの旅費と宿泊費に当てる「博覧会クラブ」を作り、好評を博した。クックの送り込んだ観光客は 16 万 5 千人であり、全入場者の 3 % であったが、それでもこれだけ多くの入場者を地方から送り込んだ意味は大きいといえるであろう²⁶。

さて、クックの旅行会社は、その後、団体旅行の行く先を海外に拡大していく。その行先は、ヨーロッパ大陸から、さらにエジプトに向かっていくことになる。すでに 1837 年には、『エジプト旅行ガイドブック』がマレー社から出版されている。これは、その後、英米で次々に発売されていくことになる旅行ガイドブックのはしりとなるものであった²⁷。その後、20 年ほどの間に、エジプトへの旅行者は急速に増加していった。トマス・クックは、そのような状況の中で、1869 年には、エジプトへの団体旅行を実施している。

かくして、近代を象徴するもう一つの現象であるツーリズムは、見世物や博覧会を通して大衆が経験してきた異文化イメージを追体験し、それを強化する装置として働くことになるのである。

5 おわりに

以上、われわれは、19 世紀イギリスを中心に、エジプトに代表される異文化のイメージがいかに歴史的に形成されていったのかを概観してきた。エジプトイメージは、近代社会の形成に寄り添うようにして形成されてきたものであり、そこには、近代という時代の知のあり方が反映されている。現代に生きるわれわれが抱く異文化イメージも、その歴史と決して無縁ではないのである。

しかし、現代社会はまた、近代的基盤が崩れ始めたポストモダニズムの世界でもある。グローバル化と情報化が急速に進行する中で、異文化を見るわれわれの視線も急速に変化していかざるをえない。21 世紀は、新しいイメージ形成の時代でもあるのだ。今後急速に進むであろう変化に対処するためにも、



Fig. 8 エジプトの展示
(松村 [1986] 40 頁)

26 春山、『万国博』、第 10 章、吉見、『博覧会の政治学』、50 頁。

27 ブレンドン、『トマス・クック物語』、210 頁。

現在のわれわれが拠って立っている歴史的基盤を再確認しておくことには、重要な意味があるのではないだろうか。

参考文献

- R・D・オールティック著、小池滋監訳、『ロンドンの見世物Ⅰ』、国書刊行会、1989年。
R・D・オールティック著、小池滋監訳、『ロンドンの見世物Ⅱ』、国書刊行会、1990年。
R・D・オールティック著、小池滋監訳、『ロンドンの見世物Ⅲ』、国書刊行会、1990年。
エドワード・W・サイド著、板垣雄三・杉田英明監修・今沢紀子訳、『オリエンタリズム』、平凡社、1986年。
ニナ・バーリー著、竹内和世訳、『ナポレオンのエジプト 東方遠征に同行した科学者たちが遺したもの』、白揚社、2011年。
ミシェル・フーコー著、渡辺一民・佐々木明訳、『言葉と物：人文科学の考古学』、新潮社、1974年。
ピアーズ・ブレンドン著、石井昭夫訳、『トマス・クック物語 近代ツーリズムの創始者』、中央公論社、1995年。
鹿島茂著、『絶景、パリ万国博覧会 サン＝シモンの鉄の夢』、河出書房新社、1992年。
春山行夫著、『万国博』、筑摩書房、1967年。
松村昌家著、『水晶宮物語 ロンドン万国博覧会 1851』、リプロポート、1986年。
吉見俊哉著、『博覧会の政治学 まなざしの近代』、中央公論社、1992年。
L. Kriegel, "Narrating the Subcontinent in 1851: India at the Crystal Palace," in L. Purbrick (ed.), *The Great Exhibition of 1851: New Interdisciplinary Essays*, Manchester University Press, 2001, pp. 146-178.
J. McKean, *Crystal Palace: Joseph Paxton and Charles Fox*, Phaidon Press, 1994.
T. Mitchell, "Orientalism and the Exhibitionary Order," in Dirks (ed.), *Colonialism and Culture*, University of Michigan Press, 1992, pp. 289-318.

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成20年度～平成24年度）」によって行われた。